

「それにしても...まさかこんな事になるなんてね...」

そう呟くヘレナの手には、分厚い魔導書と...子供用の玩具...所謂ガラガラが握られていた。

振ると音が鳴って、小さな子供にとっては興味をそそられる事、間違いなしの逸品だ。

「でも...こんなに可愛いパパを見れるなんて...あの...なんて言っただけ...四天王だか...五本指だか...七魔人だか...?あの魔族に感謝しなきゃ...ねえ...パパ...♥」

ソファで、隣に座るライラも片手に握ったガラガラを振りながら、腕の中に抱く子供をあやす。

「なに呑気な事言ってるのよ...この呪い、魔族特有の手癖でもって、術が複雑に絡み合っていて...私でも簡単に解呪出来ないんだから...!」

「でも、ヘレナなら解呪出来るんでしょ...?だって、エルフなんだから...」

「まあね...!ふん、今に見てなさい...あのクソ野郎...絶対に解呪して、次こそはあいつを討伐してやるんだから...!」

ヘレナは憎たらしい魔族を口汚く罵りながら、手にした本を読み進める。

順調に魔王の住まう城へ旅を続けていた三人。

しかし、魔王の気配が強くなるにつれて、手練れが現れた。

魔王の側近を名乗る魔族から放たれた呪文をサポート担当である彼二人にとってのパパが食らってしまい、その姿を今は赤子にまで変えてられてしまった。

このままでは旅を続けることが出来ない2人は、村に交渉して滞在する場所を借りこそうして、解呪までの間、旅を一時中断していた。

「さ～て、じゃあそろそろパパにはご飯の時間ですよ～…♥大人のパパみたいに上手には出来ないけど…村の人に教わった離乳食があるんだあ…♥ヘレナ、パパの事、ちょっと貸して」

「はいはい…ほ～らライラママのところに行くわよ～…♥」

小さな彼をライラにバトンタッチ。

ライラは、手を伸ばして用意していた特製のミルク粥をスプーンを使って彼に食べさせてあげる。

「どう…？♥おいちいでちゆか～…？♥」

ライラの言葉に、彼はコクリコクリと頷いて、次の一口を要求する。

「ふふ、いっぱい食べてね、パパ…♥」

そんなライラの手慣れた様子にヘレナは疑問を投げかける。

「そういえば、さっきから思ってたけどライラ、子供をあやすのが上手いわね～」

ライラは、懐かしそうな表情を浮かべながら、その訳を話す。

「元々村では、小さな子達の遊び相手してたし、農作業に行く家庭の赤ちゃんを預かったりもしてたから、慣れたもんだよ～…あ～…よちよち…すぐあげまちゅからね～…♥」

「なるほど、それでね～…」

ヘレナは、ライラに感心しながら魔導書を読み進める。

分厚く、仰々しい装丁のなされた魔導書。

これはヘレナがエルフの森で修行していた頃から付けている物。

ほぼ日記に近いが、その膨大な情報量の中から、この難解な呪いを解く糸口を探していた。

「う～ん…やっぱりこれかしら…」

ある程度、読み進めたヘレナはそこから当たりをつける。

「ライラ、パパご飯食べ終わった...？」

「ん～...今、ゲップしてもらおうとこ～...ちょっと待ってね...」

ライラは彼を少し抱えて、背中をトントン。
すると、けぶっ...とゲップする。

「ん、これでいいかな...はい、ごちそうしゃまでちた～...♥いっぱい食べれて、えらいえらい...♥じゃあ、ヘレナママのところにいこ～ね～...♥」

優しく、彼の頭を撫でながらヘレナにそっと渡す。
ヘレナは、ニコニコと笑う彼を見ながら、開けた本のページを指差す。

「とりあえずこれをかけてみる...でも、多分一回じゃ完璧に解呪出来ないと思うのよね...」

「かけるのは大丈夫なの...？それでどうにかなったりしない...？」

「大丈夫よ...多分...」

「た、多分...！？」

「わ、私だって、こんな複雑な解呪はしたことが無いの...！も、文句があるなら、ライラ...
貴方がやってみる...？」

「今はヘレナしか頼れないんだから...本当に頼むよ...？」

「分かってる...！ともかくやってみるわね...」

ヘレナは意を決して、彼の頭に手を置き、呪文を唱える...

ヘレナが置いた手の下から、魔族が使う言語を象った呪文が溢れ出てくる。

それを集中しながら、読み解き...呪文を分解していく...。
数秒の沈黙の後、ヘレナは彼を座っていたソファに置いて一息つく。

「どうなったの...！成功したの...！？」

「成功はしたわ...半分だけ...」

そう言うと、ソファに座った彼の姿がどんどん大きくなっていく。

赤子から、生後数カ月...1年...2年...
まるで時間が早回しになる様に、急激な成長を遂げてゆく。

しかし、その成長は『少年』と言った具合で止まってしまった。

「とりあえずここまでは解呪出来たわ…」

「わあ…！か、可愛い～…！」

ライラはヘレナの苦勞など、蚊帳の外。
彼を優しく抱きあげる。

「かわい～…パパの子供の頃はこんなに可愛かっただね～…♥」

嬉しそうなヘレナに、抱きあげられた彼は不安そうな顔で問いかける。

「お、お姉ちゃん…誰…？」

それを聞いた二人は顔を見合わせてから、自己紹介。

「ふふ、初めまして…♥キミの将来のお嫁さんのライラだよぉ～…♥」

「一応…同じくヘレナよ…♥」

「？？？」

まだ、状況が飲み込めていない彼を尻目にライラは彼を安心させようと、言葉を続ける。

「って、やっぱり記憶も飛んじやってるんだね～...ともかく安心して、僕達勇者とそのお供なんだ...！ほら、見て...！」

傍らに立てかけていた聖剣を指差すと、彼の顔がパツと明るくなる。

「わ、わあ...！す、すごい...！絵本で見た剣と一緒にだあ...！」

嬉しそうなその笑顔を見て、二人ともくすつと笑う。

「ふふ、可愛い...♥良かった...ちょっと落ち着いたかな...」

「そうね...パパにもこんな純粋な時期があったのね～...」

「それで、あと半分はどうするの？」

「ここまでくれば、もう少し解析すれば元通りよ...ただ、続けてするのはこの子にも負担になるわ...今日はゆっくり休んで、また明日行いましょう...ともかく上手く行って良かったわ...」

「そっか、良かった...流石ヘレナだね...エルフは凄いなあ...」

ライラもこればかりは心からの感心を持って、ヘレナを褒める。

「じゃあ、おねんねしよつか...！折角だし、三人で一緒にね...！」

「そうね、いつもみたいに...一緒に寝ましょうか...！」

「い、いつも...？う、うん...！お姉ちゃんたち...よろしくお願いします...」

「お、お姉ちゃんだって...ヘレナ...！♥」

「あはは...この歳でお姉ちゃんは恥ずかしいわね...♥」

二人は照れながらも、寝室へ向かう。

ライラは彼を抱いたまま、ベッドに横になり、彼を中心に二人が挟み込むような形で仲良く川の字でベッドに入る。

そうして、二人はぎゅ〜〜〜♥と彼を包み込んで顔を寄せる

「じゃあ、おやすみなさい...パ...じゅなかった...僕くん...♥」

「おやすみ...♥」

両方から、囁かれる甘ったるい声に...彼は俯く。

「あら...ちょっと刺激が強すぎたかな...♥」

「まだ初心だものね...いつもはこうして一緒に寝てたから、つい癖が出ちゃったわ...♥」

二人はくすくす笑うも、彼はまだ恥ずかしそうに俯く。

「あれ、どうかした...？お腹痛いの...？」

彼の手が、腹部にあるのに気づいたライラ。
心配そうに、手を添えると...

「あっ...♥ねえねえ...ヘレナ...♥ここ...触ってみて...♥」

ライラに促されたヘレナも、その手の感触にいよいよ気づく。

「あらあら...こっちは大人になっちゃってるのね...♥」

そう、身体は少年だが、股間に生える一物は身体の成長を飛び越え
前と変わらぬ剛直な物がしっかりと生えていた。

「お、お姉ちゃんたち...触っちゃダメだよ...♡んっ...♡」

彼の可愛い声に...ライラのスイッチが入る。

「どうして...?♡これ...おちんちんでしょ...?♡なんでこんなに大きくしてるの...?♡」

「こ、これは...その...♡」

恥ずかしがる彼に、続いてヘレナのスイッチも入る。

「私達に挟まれて...興奮しちゃったのね...?♡」

「ご、ごめんなさい...♡」

素直に謝る彼に、二人はますます興奮を抑えきれない...

二人は、器用に来ていた服を脱いで、ベッドの外に放り投げると
裸になって、胸を押し当て彼を包み込む。

ライラの胸に顔が...背中にはヘレナの大きな胸が...ぎゅ〜〜♡♡♡と押し当てられる。

「これ...どうしたい...?♥」

「勿論...又キ又キしたいわよね...?♥」

「ぼ、ぼくどうしたら良いか...分かんないよ...♥」

「「ごくり...♥」」

二人は、その初心すぎる反応に思わず生唾を飲み込む。

「じゃあお姉ちゃんたちが...教えてあげる...♥」

ヘレナとライラは、ベッドの上で脚を抱えてまんぐり返しのポーズで
彼におまんこを見せびらかす。

そうして、硬くなっている彼のチンポを指差す。

「それはね...女の子の...大事な場所...♥おまんこをぬぼぬぼする為にあるんだよ...♥」

「そうよ...♥おまんこが...こ~れ...♥ここにね...それをずっぽしハメるの...♥そしたら...す
っごい気持ちいいのよ...?♥」

二人は器用に指で、おまんこをぐに〜〜っ…♥と開く。

「ほら…ここに挿れるの…♥おちんちんを…ぐ〜〜っ…♥」

「ほら…好きな方から使っていいわよ…♥怖がらないで…おいで…♥」

二人の甘い誘惑に、彼はゆっくりと身体を寄せ…まずはライラのおまんこにチンポをあてがう。

「ふふ…いいよ…♥僕くん…♥そのまま…おちんちん…ぐ〜〜っ…♥おゝッ…♥」

ライラが言い終わらぬうちに、彼はおちんちんをぐっぽり根元まで収めてしまう。

「んおゝッ…！♥こ、これやつべ…♥おゝッ…♥ひ、久しぶりのパパのおちんちん…♥おゝ〜
〜ッ…♥形も…長さもやつぱ…一緒…♥おゝッ…♥ぬほおゝッ…♥」

「お、お姉ちゃんの中…ぬるぬるだよお…♥んっ…♥」

「そ、そうでしょお…♥おゝッ…♥あやしてる時に母性本能くすぐられて…まんこ濡らして
たのバレちゃったなあ…♥」

「ライラったら…なにしてるのよ…♥」

「と、ともかく僕くん...♥ほら、腰パンパンって出来るかなあ...?♥」

「こ、こう...?♥」

恐る恐る腰を引いてから、どちゅッ...!♥と打ちつける。

「ぬひおゝッ...!♥おゝ〜〜〜ッ...?♥そ、そんな感じッ...くひッ...♥」

ライラに褒められた彼は、さらに腰を動かし、おまんこを打ち据える。

「ぬおゝッ♥おゝッ♥おんゝッ♥おゝ〜〜〜ッ♥そ、そう...!♥おゝッ♥じよ、上手...上手ッ...!♥ぬほおゝッ...♥ホントに...上手ッ...ぐおゝッ...!♥」

「うわあ...ホントに記憶ないのかしら...♥えっぐい腰の振り方してるけど...♥」

ヘレナは揶揄いながらも、自分の秘部に指を挿れてしっかりとほぐし始めていた。

「んおゝッ!♥ちょ、ちよっとおゝッ...!♥おんゝッ♥おんゝッ♥おゝ〜〜〜ッ♥」

「勇者のお姉ちゃんの...すごい気持ちッ...!♥」

「うへへ...おゝッ...!♥そ、そうでしょお...♥おゝッ...!♥おんゝッ...♥おんゝッ...♥お姉ちゃんのおまんこはあ...おゝッ...!♥ぼ、僕くんのだからねえ...!♥おゝッ...♥ぬほおゝッ...!♥おんゝッ♥おんゝッ♥」

「お姉ちゃん...！♥お姉ちゃん...！♥」

早くなる腰に、荒くなる二人の息。

そして遂に...

「お姉ちゃん、なんか来るッ...！♥来ちゃうッ...！♥」

「あっ...！♥いいよ...！♥気持ちいいのッ...！♥上がって来たでしょお...！♥出してッ...！
♥お姉ちゃんのおまんこの奥に...びゅ〜〜〜って...おちっこだちてッ...！♥」

ライラは、彼の腰に脚を回して、がっちりとホールドする。

「ライラったら、必死になっちゃって...♥」

「仕方ないでしょおッ...！♥ひ、久しぶりのパパのおちんちん...！♥おッ♥おッ♥ん
おッ♥おッ〜〜〜ッ♥チンポ膨らんでりゅッ♥おッ♥おんッ♥お精子出してッ♥びゅ〜
ッ♥ってしてッ！♥」

「んッ！！！！♥」

思いつきどちゅんッッッ！♥と打ちつけた彼は、身体を震わせながら射精を始める。

「おッ〜〜〜ッ...！♥で、でてりゅッ...♥身体が小さくなくてもお...お射精ちゅよッ
...！♥おッ〜〜〜ッ...♥」

身体を震わせながら、イキ散らすライラ。
お互いにそれが収まった頃、彼はライラからチンポを抜く。

「はあ...はあ...♥お、お姉ちゃん...大丈夫...?♥」

ライラを心配するが、突然隣から手を引かれる。

「もう...!♥私の事、忘れないでよ...!♥ほら、次はこっちも使ってえ...♥」

ヘレナは、待ちきれないといった具合におまんこを広げる。
そうして始まるヘレナとの二回戦。

「おッ!♥お~~~~ッ♥パパのシヨタチンポえっぐッ...!♥おッ...!♥おんッ
...!♥お~~~~ッ...!♥ぬおッ♥お~~~~ッ♥やべッ♥すぐおまんこイクッ!♥♥♥」

すっかり彼のチンポにハマった二人は、少しの間だけ解呪を先延ばしにして、この時間を
楽しむ事にしたのだった...